教皇様の声

聖ヨゼフ―約束実現の証人

教会では、聖ヨゼフを崇敬します。「正しい人」ヨゼフは救い主の母処女マリアの法律上の夫ですが、当然、教会全体の称賛をうけてしかるべき御方です。

教会はまた、「職人」、勤労者、おそらく大工としてのヨゼフを敬っています。神の子イエズス・キリストを日ごと仕事場に迎えることができたのは、この世に生をうけた勤労者のなかでは、ヨゼフただおひとりでした。イエズスに大工の技術を教え、大工としての道へ導いたのはヨゼフです。材料に関する問題をどのように解決するか、一塊の材料をつかっていかにして道具を造りだすかを教えたのも聖ヨゼフでした。(…) ヨゼフのおかげで、仕事の世界に属することになったキリストご自身が、神のみ前で、労働の尊さをはっきりと示してくださったのです。(…)

教会の秘義のなかで

この「正しい人」ヨゼフの生涯と召しだしは、教会の秘義に深くかかわっています。ヨゼフが「目立たない」生活のうちに、「目立たずに召命を全うした」という点については、福音書を読めばすぐにわかります。ところで、福音書のどこを開いても、ナザレトの聖ヨゼフのことばはみつかりません。しかしながら、福音書の一連の出来事を読めば、神が聖ヨゼフの召命を深く教会の秘義のなかに組み入れられた様子はよくわかります。(…)

正しい人ヨゼフ

ナザレトの聖ヨゼフの生き方に思いをめぐらしながら、典礼の朗読箇所を読み返してみましょう。聖ヨゼフは「正しい人」で、彼が義とされたのは、その信仰のおかげです。「死者を生かし、存在しないものを存在させられる」神を信じたからでした。右の引用句はアブラハムについて述べるところですが、今は、「望みなきときにもなお望みを捨てず信じた」ナザレトの聖ヨゼフにあてはめて読み返してみたいと思います。「望みなきときにもなお望みを捨てずに信じた」のは、救いの歴史上からみて決定的な瞬間のことで、永遠の御父である神が、「ご自分の御子をこの世につかわし、」アブラハムへの約束を実現されたときでした。そのとき、すなわち、ヨゼフの許婚マリアの胎内で生ける神のみことばが人となられたとき、ヨゼフの信仰がアブラハムの信仰にならぶことがはっきりわかりました。天使のお告げを聞いて、マリアが「聖霊によってみごもっているのがわかった」のです。(…)

そのとき聖ヨゼフは、アブラハムと同じように、大きな信仰の試みを受けました。そして、「正しい人」聖ヨゼフは、「存在しないものを存在させられる」神を信じたのです。

事実、ヨゼフの許婚ナザレトの処女マリアの胎内で、神の御独子のもととなるべき人性を聖霊の力を通して存在させ給うたのは、実に神ご自身でした。(…)

アブラハムがかつて信じたように、ナザレトのヨゼフは神を信じました。主の天使が告げる神のおことばを信じたのです。「ダビドの子ヨゼフよ、ためらわずにマリアを妻として迎えよ。マリアは聖霊によって身ごもっている。彼女は子を生むからその子をイエズスと名づけよ。なぜなら彼は罪から民を救う方だからである。」(マテオ1・20～22)

はじめのうちは、「マリアを公に辱めようとせず、ひそかに離別しようと決心していた」(同上1・19)ヨゼフでしたが、今度は、「主の天使から命ぜられたとおりに」しました。(同上1・24)　ヨゼフはマリアと共に胎内の御子を迎えいれたのです。(…)

アブラハムの信仰

アブラハムの信仰を糧として教会は生きています。そして、教会はその始まり、つまり世界が待ち望んでいたことの実現を、ナザレトのヨゼフの信仰に関係ありと考えているのです。

ヨゼフの姿からにじみ出てくるのは、アブラハムから受けついだ信仰です。ところで、聖ヨゼフの信仰に匹敵するだけでなく、それを超えるのが聖母マリアの信仰です。マリアとヨゼフはこのすばらしい信仰という絆で結びついています。人々の目にはふつうの婚姻の絆でしたが、神と教会の前には、聖霊による婚姻でした。

この信仰における婚姻を通じて、マリアとヨゼフはその秘義の証人となり、管理者となったのです。この秘義のおかげで被造界、とくに人々の心は、ふたたび生ける神のおすまいとなるのです。

ナザレトのヨゼフは「正しい人」です。完全に、「信仰によって」のみ生きぬいた人ですから。その上、英雄的な信仰を有する敬虔な人でもありました。(…)

ほんとうに雅量のある人、信仰の篤い人です。けれどもそれは、聖ヨゼフが多くの発言をしたからではなく、とくに、生ける神のみことばによく耳を傾けたからです。

沈黙のうちに神のみことばに聴き入りました。いつなんどきでも生ける神のみことばの真理を受け入れ、愛の心でそれを果たす心構えができていたのです。(…)

「ダビドの子ヨゼフよ、ためらわずにマリアを妻として迎えよ。マリアは聖霊によって身ごもっている。」(マテオ1・20)　ナザレトのヨゼフのように、みなさん方もためらわずにマリアを迎え入れてください。マリアの子イエズス・キリストを、ためらわずに日々の生活のなかにむかえいれてください。ヨゼフのような篤い信仰をもって、ためらわずに、むかえいれなければなりません。ぐずぐずしないで、家庭に主をむかえいれてください。ちょうど、ヨゼフがナザレトの家にむかえいれたように、躊躇せず、日常の仕事場にイエズスをむかえいれるのです。ぐずぐずしていないで、キリストをあなたの「世界」に迎え入れてください。そうすれば、この世界全体も、まことに「人間らしい」世界になるでしょう。実に、神であり人である御方だけが、この社会を真に「人間らしく」することができるのです。(一九八二・三・十九)

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1983 精道教育促進協会 〒(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12―6

真理と愛とあわれみの道

1　福音史家聖マルコは、まことに簡潔な文章でナザレトのイエズスの四十日間にわたる断食の秘義を記しています。「霊はすぐイエズスを荒れ野に送った。イエズスは荒れ野で四十日間サタンの試みを受け、野獣と共に住み、天使たちはイエズスに奉仕した。」(マルコ1・12～13)

洗礼者ヨハネが捕えられてから、イエズスはガリラヤへおもむき、そこで宣教を開始されます。「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じよ。」(同上1・15)

ナザレトのイエズスは四十日間の断食をして、神の国を告げる前の序曲となさいましたが、そうすることによって信仰の道を人々にお示しになったわけです。万一、この示しがなかったとしたら、神の国の福音は荒れ地にまかれた種のようなものとなり、実を結ぶすべもなかったことでしょう。

2　本日の典礼をみると、神の国の福音の始まりが虹にたとえられていることに気づきます。それは、洪水の後、ノアの子孫と結ぶ契約のしるしでした。

使徒聖ペトロの第一の手紙の中で、教会はノアの箱舟にたとえられています。死と罪にうち勝ったキリストが今もあがないのみ業を続けておられるのはその教会のなかにおいてなのです。

ノアの箱舟は閉ざされた空間でしたが、キリストのみ業は場所にも時間にも制限されていません。キリストのみわざの中で、教会はしるし、道具としての役割を果たしています。

義人キリストは不正な者の身代わりとなり、私たちを神に立ちかえらせるために、一度だけ人々の罪のために死去なさった。

キリストは御体に死を受けたが、霊において生かされた。

キリストは天にのぼって神の右に座られる。そこでは、天使たちと能力と勢力はキリストに服従する。

聖霊に導かれたキリストは「囚われの魂の所に行って救いを宣言した。その霊とは、ノアのとき、従わなかった人々である。」(ペトロ①3・19)

その同じキリストが洗礼によって私たちを救われる。「体の汚れを除くことではなく、(…)神に対して正しい良心を求めること」(ペトロ①3・21)で、キリストは私たちをあがなわれる。キリストの復活によって、私たちは救われ、あがなわれるのです。

3　四旬節の典礼は断食で始まります。まず、キリストが示された手本を示し、ついで教会と全被造物のうちに働くキリストのあがないの御力、すなわちキリストのあがないと聖化の御力について思いおこさせてくれるのです。

四旬節とは、私たちの前に開かれている道です。全教会は四十日間この道を歩んで行かなければなりません。

4　だから、今日、私たちは祈るのです。「主よ、あなたの道を示し、その小道を教え、その真理によって導き、教えを下されよ。あなたは、私の救いの神。日夜、私はあなたを待ち望む。」(詩篇25・4～5)

四旬節は真理へ至る道です。

人は神のみ前で自分自身についてすみずみまで知りつくさねばなりません。人はまた、神の教えと神の掟、神のみ旨をくりかえし学ぶ必要があります。そして、自分の良心をそれらの真理に照らし合わせてみなければなりません。そうすることは救いの道、つまり希望の道を歩むことなのです。

5　そこで、教会はもう一度祈ります。

「主よ、その慈愛と憐れみとを思い出されよ、常に絶える事のなかったそれを。私の若さの迷いと罪とを忘れ、おんあわれみによって、私を思い出されよ、あなたの愛あるがために、主よ。」(詩篇25・6～7)

四旬節は真理の道であり、ふたたび良心を目ざめさせる時です。

とりわけ、四旬節は愛と憐れみの道です。愛を通る以外に、真理にはふたたび人を生命に目ざめさせる力はありません。愛、つまり憐れみだけが希望の灯をもえたたすことができるのです。

四旬節の断食は、愛の叫びと言えます。心にしみこむ叫び、決定的な叫びです。四旬節とは憐れみあふれた時なのです。私たちがこの道をしっかりと自覚しさえすれば万事はうまく運びます。

6　そこで、教会は典礼の祈りを続けます。

「主は、慈悲のもの、正しいもの、だからこそ、迷う者に道を示し、へり下る者を正義に導き、へり下る者に主の道を教えられる。」(詩篇25・8～9)

教会は祈ります。人すべてが謙遜になり、謙遜になることによって真理の道を歩むように。真理の道を歩むならば、罪や死、あるいは悪よりも強い愛に出会うことができるからです。教会はまた、人々が主のみ言葉に導かれるようにも祈ります。「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出るすべての言葉によって生きる。」(マテオ4・4)と。

7　以上が四旬節のプログラムです。(…)四旬節の始まりにあたる今日、ローマ教会の初代の司教、使徒聖ペトロの言葉をくり返し味わいたいと思います。

愛する人々よ。「キリストも一度人びとの罪のために死なれた。義人であった彼は不正な者の身代わりとなり、私たちを神に近づけるために。」(ペトロ①3・18)

(一九八二年四旬節)

聖金曜日

十字架は「万人の贖(あがな)い」のしるしです

1　「御身の十字架をあがめます。」　さあ、今日は十字架を特別なやり方で礼拝する日です。キリストの十字架。いまわしい死の道具は、夜明けから用意されてあり、聖金曜日の一日中私たちの心をとらえることでしょう。私たちは一日中、知恵と心をあげて、主のご受難の場面を一歩一歩たどって行きます。ピラトの総督府からカルワリオへの道、カルワリオでの死の苦しみからご死去のときまで。その敬虔な沈黙に満ちた間中、午後の典礼の雄弁な語りかけに聞き入ります。(…)

そして、夜も更けた今、私たちはコロシウムにやって来て、十字架の刑と死と埋葬、つまり「十字架の道行」全体を歩むのです。

2　コロシウムでは十字架を遺跡の真ん中に立て、初代教会の信者すべてが十字架の宣告を受けたり、野獣の中に投げこまれたり、さまざまな拷問をうけて殉教し、殺されたことをまざまざと思いださせます。

初代の信者たちは、実を結ぶためには死な

説教・講話・書簡等の抄訳

一九八三年は特別聖年

本日は、みなさん方にお知らせするのを心待ちにしていたことがあります。きっと、みなさん方、そして教会全体にとって大きな喜びとなることを確信しています。私の尊敬する前任者ピオ十一世は、贖いの年一九〇〇年目を記念して、一九三三年を特別聖年とする旨厳粛に宣言なさいましたが、来年は贖いの一九五〇年記念にあたるのです。

今までは途中に、つまり五〇年目に記念する慣習はありませんでしたが、一九八三年には記念を行なう理由が充分あると思われます。まず第一に、記念の中心となることがらが強調されるべきです。それは、キリストが成就してくださったみわざを思って、人々がより一層の愛と敬いを抱くようになるためなのです。人間の贖い主キリストは、ご受難とご死去、ご復活という過ぎ越しの秘義によって、贖いを実現してくださったのですから。

第二番目。近いうちにシノドス(司教会議)がやってきます。テーマは教会の「使命における和解と悔悛」です。聖年は、このテーマを活発かつ深く内省するのに大いに役立つことでしょう。

さらにまた、現代人の思いと愛とを、告解の秘跡に向けて集中させることにもなります。ところで、この告解こそ、御血による贖いの宝が一人ひとりにそそがれるよう、キリストが制定してくださった秘跡です。

ちなみに聖書には次のように書いてあります。「まことにあなたたちは高値で買われたものである。」(コリント①6・20)「金銀などの朽ちる物によるのではなく、傷もなく汚点もない小羊のような、キリストの尊い御血によることをあなたたちは知っている。」(ペトロ①1・18)

三つ目に考えるべきこと、それは贖いの年が西暦二〇〇〇年目の聖年にとって、すばらしい準備となる点です。

以上のような理由、及び数々の要望を検討した結果、一九八三年を聖年と定め、その開始を四旬節とすることはまことに時機にかなったことと思われます。この度の聖年が、あらゆる人々の霊的刷新の機会になるよう、主に御助けを願いたいと思います。慎重でよい準備がなされ、とりわけ豊かな実りをもたらす聖年となることを信じつつ。

ねばならない「種子」のように、地に倒れ、そしてキリストの十字架を見つめながら、恐らく無言のうちにくり返したことでしょう、御身の十字架をたたえますと。

彼らにとって十字架は、苦しみと死からとき放つ「生命」のしるしとなりました。

御身の聖なるご復活をほめたたえん

3　この十字架はこの世でどれほどの地を通ってきたことでしょう。何世代を渡ってきたのでしょう。幾世代にもわたるキリストの弟子たちにとって、この世での道行をたえるよすがとなったのではないでしょうか。

聖なる十字架のおかげで、どれほど多くの人々が苦しみにたえ、死の準備をしたことでしょう。血を流すにしろ流さないにしろ、大勢の人々がキリストのために殉教する覚悟をもつことができたのではないでしょうか。

大勢の人々が、十字架のおかげで、今も引続き死の準備や殉教の覚悟をしていることでしょう。

世界各国の「教会史」には、これら「殉教史」のほんの一部しか記録することができません。

十字架を通してキリストの証人となった人びと全部を聖人として教会の祭壇上でたたえることはできないのです。同世代に生きてきた人々のことを考えただけでもこれは明らかでしょう。

4　「御身の十字架をたたえます。」キリストは十字架上でみずから主であることをお示しになりました。キリストは死を受け入れても、命をお与えになったのです。

キリストは「亡くなられ」ましたが、それだけでなく、命を与えてくださいました。「友人のために命を与える以上の大きな愛はない。」(ヨハネ15・13)キリストは命をお与えになったのです。死を受け入れて、命をお与えになったのです！

「父よ、あなたのみ手にゆだねます！……私の霊をゆだねます。」(ルカ23・46参照)これが十字架のキリストの最後のお言葉です。キリストは私たちのために、私たち一人ひとりのために命をお与えになりました。キリストが命をお与えになった人たち全体からみると、ここにいる「私たち」はそのほんのひとにぎりにすぎません。キリストが命をお与えにならなかった人など、世の初めから終りに至るまで一人としていなかったのです。

キリストは万人のために命をお与えになりました。すべての人々を贖われたのです。十字架は「万人の贖い」のしるしです。「木(十字架)のおかげで、全世界によろこびがもたらされた」のです。

5　十字架という門を通って神は人間の歴史の中へ入ってこられました。そして、歴史のなかにおとどまりになったのです。

十字架とは、神が私たちの人生に絶え間なく介入するための門なのです。

このように考えると、私たちが絶えず十字架のしるしをし、同時に「父と子と聖霊のみ名によって」と唱える理由がよくわかります。(…)

この祈りの言葉を唱えて、神をお招きします。おいでください、とおねがいするのです。祈りの言葉を十字架のしるしにあわせるのは、十字架を通って人間の心に入ってください、と神に願うためです。

願いを聞いた神は、人間の一切の行ない、思い、言葉の中にお入りになります。つまり、人間と世界の生活全体に介入してくださるのです。十字架のおかげで私たちは神に向かって開かれた存在になります。世界も十字架のおかげで、神に向かってみずからを開くことができるのです。

6　祝福も十字架のしるしで与えられます。司教や司祭の祝福も、親が子どもにする祝福も、十字架のしるしをして与えられます。キリストの十字架にあずかった私たちは、神ご自身がくださるこの上なき善と、私たちを神のもとへと導くあらゆる善きものを期待することができるのです。

以上すべてが、まもなくみなさん方にお送りする私の祝福をはじめ、「祝福」すべての意味です。

すべては過ぎ去りますが、十字架はこの世と神との間に残ります。十字架を通して神はこの世にお残りになるのです。

7　愛する兄弟姉妹のみなさん、私たちは今十字架の秘義を黙想していますが、その秘義のためにささげられた聖金曜日をすごしたあとで、生ける神、父と子と聖霊に、より一層近づくことができますように。キリストのご死去のしるしによって、主の現存と御力とを生き生きと感じることのできますように。アーメン。

(一九八二年聖金曜日)

不変の教え

キリストは屈辱のあとで称揚された

1　「ホザンナ、賛美されよ、主の名によって来られる者。祝されんことを。いまや来る、われらの父ダビドの国。いと高きところにホザンナ。」(マルコ11・9～10)　ナザレトのイエズスが称揚される日。

人々の目の前でナザレトのイエズスが称揚される日のことでした。イエズスは人々がほめたたえるままにさせておかれます。聖なる地のあちこちの地方からおびただしい群衆が到着するまさにその時、弟子たちに囲まれ、ろばの背に乗ってエルサレムに入城なさいます。むしろ称揚されるような状況を、イエズス御みずからつくり出されたと言ってよいでしょう。

ファリサイ人が、「先生、弟子たちをしかってください」と言った時、イエズスは、「私は言う、彼らが黙ったとしても石が叫ぶだろう」とお答えになりました。(ルカ19・39～40)

その日、ナザレトのイエズスは、御父のみ旨に従って、この世で、救い主としてたたえられることに反対なさいませんでした。救い主の光栄がエルサレムの人々の目の前で、同郷人たちの口を通してたたえられるのをおゆるしになったのです。

聖書は実現されなければなりませんでした。救い主の光栄が王にふさわしい方法であらわされる、つまり、ダビドの子孫がほめたたえられなければならなかったのです。

ですから、本日私たちは、人々の眼前でナザレトのイエズスが称揚される日を祝っています。聖週間の典礼に入る本日から、神のみ前で救い主が称揚される場面を黙想しはじめるのです。

近づくご受難

2　枝の主日の典礼はすばらしいものです。典礼が述べているあの日の出来事そのものとくらべてもひけをとらないでしょう。

救い主をたたえる熱狂的な「ホザンナ」の叫びは暗い影に被われようとしている。刻々と近づくご受難の影のことです。やがて成就する預言の深い意味を味わってみましょう。

「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王はろばに乗ってこられる。」(ヨハネ12・15、ザカリア9・9参照)　救い主の入城を待ちかまえて人々が熱狂的に歓迎する日に、シオンの娘が恐れを抱く理由などなかったのではありませんか。

実はあったのです。詩篇の言葉が実際にナザレトのイエズスの口からでて、預言が成就する時が近づいたのです。「私の神よ、私の神よ、なぜ私を見捨てたもうたのか。」(詩篇21(22)・2)　この言葉を十字架の高みから、イエズス御みずから発せられました。

そこで私たちは、「ホザンナ」とうたう人々の熱狂の証人ではなく、ピラトの中庭やゴルゴタの丘の上で投げかけられるあざけりの目撃者になります。詩篇がえがく場面に立合うことになるのです。「私を見る人はみなあざけり、口を曲げ、頭を振る。(彼は主によりたのんだ。主が彼を救うだろう、主が救うだろう、主は彼を喜びむかえたのだから)」。(同上21(22)7～8)

死に到るまで従順に

3　枝の主日の典礼では、キリストのエルサレム凱旋についてしばらく考えるわけですが、それだけでなく、ご受難の瞬間を垣間見ることにもなります。「私は手足を縛り上げられた。私は自分の骨をみな数えることができた。(…)」　そののち、「私の衣類を互いに分け、服をくじ引きした。」(同上21(22)17～19)

詩篇作者は、すでに聖金曜日の出来事を自分の眼で見ているがごとく鮮明に、十字架の場面をえがきだしています。その時がつい手の先まで近づいてきました。そして、いよいよその日、キリストは、死ぬまで、十字架上の死に到るまで、自分を卑しくして従われたのです。(フィリッピ2・8参照)

イエズスはご自分を無とされた

4　まさにこのご受難の瞬間から、救い主の称揚という秘義が始まります。ただし、この称揚は神ご自身の中で起こったもので、喜びに満ちた「ホザンナ」の日に人々の前で起こった「歴史上」の称揚つまり、エルサレム入城のときのことではありません。

キリストははずかしめを受け、十字架上で自分を無とされましたが、それは神における称揚への序曲となりました。「キリストは本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとはせず、かえって奴隷の姿をとり、人間に似たものとなって、自分自身を無とされた。(…)」(フィリッピ2・6～7)　このフィリッピ人への手紙の言葉は、ご受難にだけふれているのではなく、ある意味で、キリストの全生涯を要約しています。ご託身の秘義全体を言い尽くす言葉だと言えるでしょう。

実際、この言葉のあと次のように続いています。すなわち、「キリストは本性として神であったが、人間の状態、人間の本性を受け入れ、「奴隷の姿」をとることによって、「自分自身を無にされた」と。いかなる時にも、「神と等しいことを利用」できるのにそうせず、「人間のすがたをとって」、人間と「同等の」立場にご自身をおくために、必要なものすべてをお選びになったのです。

このようにして徐々に、キリストが死をお受けになる瞬間へと近づきます。キリストが「死ぬまで、十字架上で死ぬまで、自分を卑しくして従われ」るその瞬間に、私たちも一歩一歩近づいているのです。

> 十字架は同時に称揚の始まりでした。キリストがご自分を無とされたときすでに称揚のときが始まっていたのです。光栄は十字架から出発します。

神はキリストを称揚なさった

5　その瞬間、つまり十字架は同時に称揚の始まりでした。キリストがご自分を無にされたときすでに称揚のときが始まっていたのです。光栄は十字架から出発します。

聖パウロは、「そこで」で始まる光栄を手紙の中でとくに強調しているようです。「そこで神はキリストを称揚し、すべての名にまさる名を与えられた。」(同上2・9)　この称揚が目に見える世界にも目に見えない世界にも拡がって行くのが、使徒聖パウロにはわかったのです。聖パウロの言葉を終りまで読んでみましょう。「そこで神はすべての名にまさる名を与えられた。それはイエズスのみ名の前に、天にあるものも、地にあるものも、地の下にあるものもみなひざをかがめ、すべての舌が父なる神の光栄をあがめ、(イエズス・キリストは主である)と宣言するためである。」(同上2・9～11)　(一九八二年ご受難節)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393